審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

「病気」の概念には曖昧さが含まれており，これまで学術的な視点から整理されることがなかった。本研究では，病気がある児童生徒の学校臨床学的検討を進めるために、障害のある児童生徒への教育支援の枠組みである「医療」「心理学」「社会学」「教育学」から，「病気」について，包括的にみた捉え方と支援にとって求められるから内容から整理を行っている。その上で，現職教員としての活動フィールドを生かし，病気がある児童生徒の支援ニーズと課題を把握するために病弱特別支援学校に在籍したことのある対象者本人への半構造化面接による調査を行い，病気がある子どもの教育における授業の意義や進学後などの課題について論じている。また，実際に地域にある中学校の授業担当教員と授業の共同立案を行い，心身症がある生徒への手立てを講じた授業実践を行ったり，病気のために病院に長期入院している重度重複障害のある生徒の教育支援計画に ICF の観点を取り入れて授業に参画を目指す実践研究を行うなど，独創性が示されており，教育方法論の研究における意義を多く有している。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究において，病気がある児童生徒の疾患や教育支援方法を包括的に検討するために調査研究を展開した。質問紙調査における対象は，①全国の病弱特別支援学校の教員，②全国の訪問学級を有する肢体不自由特別支援学校の教員，③病弱特別支援学校に在籍したことのある当事者であり，質問紙調査から病気のある子どもの現況・実態と教育支援などの課題を明らかにし，面接調査では当事者自身が求める支援や教育システムのあり方などについて，その回答データの整理・分析・考察が行われている。また，本論の後半においては，病気がある子どものアセスメント，個別の指導計画や授業つくり，ICT 活用，ICF の観点を取り入れた授業実践，などの教育実践研究からアプローチした。以上のように本研究は，教授学習心理学（教育工学）や臨床心理学，特別支援教育などの実践研究において，量的研究として十分な水準にあり，さらに質的研究においても実証性の高い方法がとられ，当該研究分野において妥当であると考えられる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

研究において，個人情報保護・研究倫理規定を踏まえた調査の計画と実施，データの収集・統計的手法による分析，および結果の公表と社会還元は不可欠であるが，本研究ではそれらが適切になされている。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか。

本研究の教育実践研究を具現化するために，医療と教育が実際に連携し，「学習指導計画」「学習指導案」「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」を核として，支援していく必要性に応じた実践研究を展開している。①地域の中学校における心身症がある生徒への学習支援については，学習での遅れや偏りと学習に対する意欲の低さの背景にある子ども自身の特性や問題を「学

校適応スキルプロフィール」「LDI-R-LD 診断のための調査票」「S-M 社会生活能力検査」等から吟味し，総合的な視点から支援方策を検討した。そして，授業実践の成果として，対象生徒の学習に対する意欲の向上や積極的に自分の意見を発言したり，友達と話し合うなどの姿に結び付けている。②重度重複障害のために長期入院を余儀なくされている対象生徒に対して，「ICF モデルによる個別の指導計画連携シート」を提案し，医療スタッフと協働した授業への積極的な参画を促し，カンファレンスにおいて医療スタッフからポイントを押さえた情報発信を導いている。以上の考察は，客観的な手続きや分析方法に基づいた実践がなされており，論理的にも妥当である。さらに，本研究結果は，今後，教育工学，臨床心理学等の教育方法論の研究の様々な分野で運用されることが期待され，十分な学術的水準に達していると評価される。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究では，病気がある児童生徒の学校臨床学的検討を進めるために，病弱教育という特別支援教育において，これまで整理されていなかった「医学」「心理学」「社会学」のフレームも活用して「病気」という概念や支援ニーズについて検討を行っている。その整理をもとに，病気がある児童生徒の現況を把握するために文献調査や全国調査を行い，「身体疾患」「精神疾患」「重度重複障害」の大きく 3 つに病気カテゴリーの分類からアプローチしている。とりわけ，現在増えている精神疾患のある児童生徒への授業実践事例，保護者や医療スタッフとの連携実践事例，ICT 活用による学習支援を遂行した実践事例などを取り上げて，今後の教育実践の拡がりと可能性を示した。そして，今後は病気の態様や支援ニーズなどに応じて，病弱特別支援学校を中心とした知見やネットワークを生かして，アウトリーチ型の支援を行う有用性について提案している。これらの研究成果は，通常の学級から特別支援学校に至るすべての病気がある児童生徒の学習や適応などの支援，保護者支援，といった実践の検証から臨床心理学，教育工学・教授学習心理学，特別支援教育のさらなる発展に寄与し学問的意義が高いと認められる。加えて本申請者は，研究成果の一部を国際会議にてポスター発表（IASSIDD Americas Regional Congress, Hawaii, 2015）にて話題提供を行い，我が国の病弱教育の実践と課題について発表したことは特筆すべき事項である。

以上の点を総合的に判断し，審査委員会は全員一致して，本研究が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。